

## 「令和元年度群馬県立自然史博物館活動の評価」について

群馬県立自然史博物館専門委員 石川貴敏

評価結果を見ると、調査研究の質の高さ、きめ細やかな対応を行っている教育普及事業、これまでの積み重ねにより社会的信頼を得てきたシンクタンクとしての社会貢献活動など、県立の自然史博物館として十分な専門性の高さを昨年度も維持していることがわかります。評価委員会当日に拝見した企画展「空にいどんだ勇者たち」にも表れていたように、限られた予算など制約の多い中、会期中でも工夫・改善を続け、観覧者を喜ばせようとする担当職員の意欲・姿勢には感銘を覚えました。評価委員会でも「予算は毎年減少傾向にあるが、映像撮影・編集、造作物等は可能な限り学芸職員が制作しており、クオリティも向上してきている。冬の特別展はほとんどが担当職員による手作りである」との説明を受けました。こうした真摯な取組について、県民の方々に広く知っていただきたいと思っています。また、若い世代のボランティア登録者が増えてきたこと、友の会の会員の継続率が増加していることには、希望を感じました。博物館の理解者・支援者を増やすことは現在の博物館活動において必須のことですから、さらに増やせるよう、積極的に取り組んでいただきたいと思います。

一方、収蔵スペース不足による深刻な実状（資料破損の危険性が常に伴う作業状況）、展示物の劣化・故障、学説が新しくなっても展示の更新・変更がままならない状況等、現在抱えている課題についても県民の方々に知っていただきたいと思っています。今回の評価結果に初めて加えられた「博物館基本構想」（平成 26 年度）の内容に関する職員からみた達成状況においても「施設計画」が不十分であると感じている職員が多い（49%）ことが報告されています。職員の意識傾向を調査したにとどめることなく、多くの職員が課題と感じている項目については、それぞれ解決策を検討し、まとめる必要があります。

「事業展開方向 資料が活用できる博物館へ」（「自然史情報拠点」としての施設整備（収蔵施設の充実と環境の整備）、資料の活用促進のための環境整備）の達成状況が 30% の肯定的意見だったことは、自然史博物館にとって見逃せない大きな課題を抱えていることを示しています。同じく 30% だった「博物館に必要な施設 担い手活動ゾーン」（自然史・自然環境活動を担う人材・次世代の育成をはかるための空間）の整備とあわせて解決すべきだと思います。そのためには、オンラインの利用者を含め、より多くの方々に博物館活動を伝え、理解者・支援者になっていただくことが必要です。

群馬県立自然史博物館は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、3月2日から6月1日の3カ月の間、休館を余儀なくされました。コロナ禍は未だ終息が見えず、いつ現在の状況が終わるのかわかりません。事前予約制・人数制限など、コロナ禍以前に比べて制約の多い事業活動がしばらくは続くものと思います。令和元年度同様、令和2年度の定量的評価項目の多くは、コロナ禍以前と比較することは難しいと思います。こうした時だからこそ、今回の経験を踏まえて、これからの新しい博物館のあり方（自館の方向性・持続

可能な博物館) について協議してはいかがでしょうか。来年度は、「博物館基本構想」(群馬県立自然史博物館これからの 10 年) を公表して半分が経過した時期になります。上述した課題の解決策とともに、5 年目の再検証を行っていただきたいと思います。

11 月に開催される「ドコモ×国立科学博物館 XR で楽しむ未来の展示」のように、既存の展示空間で体験を広げるためのデジタル技術の活用も始まっています。興味関心の深さなど観覧者の状況(ニーズ)に応じた解説の実施、非接触を前提にした体験・操作、博物館と県内各地をつなぐ取組(教員の働き方改革の状況を踏まえた学校とのオンラインプログラム、足を運べない方々も観覧できるサービス、尾瀬や上毛三山、利根川など県内の自然豊かなスポットと結ぶプログラム等)など、新しい技術の活用によって、博物館の魅力をさらに多くの人々に安全に伝えることができると思います。

群馬県立自然史博物館は、「バーチャルミュージアム」や「おうちミュージアム」「自然史博物館公式 YouTube ページでの動画コンテンツ配信」「群馬県動画・放送スタジオ tsulunos (ツルノス) での動画配信」など、既にデジタルやオンラインを活用した取組を行っています。オンラインを活用したバーチャルな体験と博物館でのリアルな体験を効果的に併用していくことがこれからの博物館利用だと思います。オンラインを活用した博物館体験が増えるにつれ、実際の博物館という場の魅力(資料の魅力、学芸員の魅力)がクローズアップされてくると思います。資料に触れ、学芸員と接することができる機会を増やすことで、実際に博物館を訪れること(動機・意欲・目的)につながると考えます。さらに夢を描けば、来館者も一部利用することができる「収蔵空間・調査研究空間」が整備されると、人材育成や社会教育の観点からもさらに望ましい博物館になるのではないかと考えています。

同年同月に開館した滋賀県立琵琶湖博物館は 10 月 10 日にリニューアル(グランドオープン)しました。同時期にオープンした兵庫県立人と自然の博物館、茨城県自然博物館ではリニューアル事業、リニューアル計画が推進中です。開館 30 周年を目指して、この大切な時期を有効に活用していただきたいと思います。